

3.11 後を生きる

渴いて行く地球

児玉智江

クロ猫が透明なボンベ袋を首に提げ入
って来た
どうしたのと聞くと
猫たちはみんな提げているよと言う
見渡すと鳥まで提げて飛んでいる

不思議に思っている矢先テレビニュー
スを見る

透明なボンベ袋を背負った魚が大量だ
地上に上げられピチピチ跳ね生きてい
る

棒で突付いても袋はなかなか破けない
尖った竹針で刺したら袋は破れて

魚は死に青い鱗はたちまち白い光を発
した
人の目を突き刺すほど強い光だ
この光を受け 消えて行く

海の底は毒の固まりで魚は卵の住処が
ないと言う

魚たちはきれいな海水ボンベ袋を着け
て
重そうにして泳いでいる
昆布や貝や珊瑚までが袋を着けている
と言う

そう言えば前から周囲の人たちにも着

いていた

腋の下 首の横に透明なボンベ袋を提
げている

首にはマフラーを結んでいて気がつか
ない

腋の下のボンベ袋は洋服で見えない

ボンベ袋は生きる為に必要な一部にな
っている

もうすでに花や野菜にまで着いている
透明なボンベ袋にはきれいな空気が常
備され

微生物までも着いているではないか

今やそのボンベ袋もくたびれ果て

地球上は静まり返り
骸骨が散らばり始めている
海岸は魚の残骸パレード

だからといって
誰もその残骸を観る人も

しゃべる生き物もない
変わらず赤い夕日が海へ落ちていると
言うのに

(「脱原発・自然エネルギー218人詩
集」より)

こだま ちえ 1941
年、岩手県生まれ。著
書に詩集『青い空』
『空洞のはな』、絵本
『アイヌ・ネノアン・
アイヌ』など。同県北
上市在住。



青森県六ヶ所村の核燃
料再処理施設を先月、原
爆被爆者の方たちと視察
した。原子力発電所から
出る一番悪い、あらゆる
生物を殺す毒を発するプ
ルトニウムの処理をして
いる場所である。

コンクリートに詰め海
に沈めて処理するという
計画は水圧が強くて失敗
と言う。そして、海は汚
染された。現在は土を深
く掘り、そこへすでに埋
められている。今度は土の底
から膿んで行くこととして
いる。側に二十秒いるだ
けで死ぬという毒の処理
がこれでいいのだろうか
と思う。

